

## 屍体手関節による尺側手根伸筋腱脱臼制動術の検討

沼野藤希 三森甲字 四宮謙一

東京医科歯科大学整形外科

尺側手根伸筋腱脱臼に対する再建術として Spinner 法が広く知られている。本術式は Lister 結節から翻転した伸筋支帯を用い、Fibro-osseous band を再建する方法である。過去、尺側手根伸筋腱脱臼 2 例に対し本術式を施行したが、いずれも術後早期に再脱臼をきたし追加手術を余儀なくされた。われわれは伸筋支帯が尺側手根伸筋腱を制動するのに十分な強度を有していないのではないかと考え、以下の検討を行ったので報告する。

2 屍体 4 手関節を対象とし伸筋支帯の大きさ、厚さ、走行を観察した。伸筋支帯の幅は第 1 区画直上

で平均 19.7 mm (14.2~24.3 mm)、第 5 区画直上で平均 35.8 mm (29.6~43.2 mm) であった。4 手関節いずれも橈骨遠位端から豆状骨へ横走する厚い靭帯様組織と、橈骨遠位端から近位にいったん向かい弧を描いて尺骨遠位端に向かう非常に薄い腱膜様組織の 2 つから成り立っていた。厚い靭帯様組織部分は尺骨を被覆していないため、Spinner 法では伸筋支帯のうち薄い腱膜様組織を用いざるえない。従って強固な制動のためには長掌筋腱などを利用した方が良いと考えられた。